

マキアヴェッリ政治思想とロレンツォ・デ・メディチ像の創出：『フィレンツェ史』第8巻の分析を中心に -

著者	石黒 盛久
雑誌名	世界史研究論叢 = The Journal of World History Research
号	4
ページ	1-15
発行年	2014-10-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/42139

マキアヴェッリ政治思想とロレンツォ・デ・メディチ像の創出
—『フィレンツェ史』第8巻の分析を中心に—

石黒 盛久

1 先行研究と問題提起

ロレンツォ・デ・メディチの名は今日もなお、イタリア・ルネサンスの象徴と目されている。教科書がルネサンス成立の原因に触れる際にも、彼の学芸保護活動への言及が依然通例とされるようだ¹。また多くの国際関係論の概説書が、ヨーロッパ勢力均衡系の発想の起点として、ロレンツォの外交政策を

示唆している。常套句化したロレンツォ観を整理すれば次の如くなる²。曰くフィレンツェの学問と芸術の刷新の庇護者、曰く諸国間の勢力均衡を操縦する天才的外交家。メディチ銀行の総帥として祖国を経済的繁栄に導いた、経済人としての評価も見逃せない。共和国において指導性を発揮したフィレンツェの典型的市民とする見方もある³。また詩人としてイタリア文学史に名を留めるその天才的芸術家とのイメージも重要だ。レオナルドにつき語られる如く、専門人ではなく普通人(uomo universale)たることがルネサンス的人間観の理想であるとすれば、レオナルド以上に人間の普遍性を体現した人物こそ、

ロレンツォ・デ・メディチだということになる⁴。我々がロレンツォ・デ・メディチを豪華公と称えルネサンスの象徴とするのも、彼のこの普遍性故に他ならない。

普通人ロレンツォを語るに際し引用されるのが、その著『フィレンツェ史』にマキアヴェッリが描き出した次の如き描写である。「彼については、この人物にふさわしくないとと思われるくらい、驚くほどの性的な快楽に没頭し、ひょうきん者や辛辣な者を相手に愉しんだり、子供っぽい遊戯を愉しんだりしても、その美德を打ち消してしまうほどの悪徳だとは言えない。彼の息子たちや娘たちに混じって、彼も一緒に遊んでいる姿が、何度も目撃されている。だから彼の中には気楽で好色な生き方と、厳肅な生き方を

¹ 以後本稿において基本資料として引用するマキアヴェッリの著作 (Il Principe [『君主論』], Discorsi sopra prima deca di Tito Livio [『ディスコルス』—本注においては Discorsi と略記], Istorie fiorentine [『フィレンツェ史』]) については全て、N. Machiavelli(a cura di Mario Bonfantini), *Opere*(La letteratura italiana-Storia e testi Volume 29), Milano-Napoli,1954 に依拠している。また『戦争の技法』についてはこの全集(Opere)に抄訳しか所載されていないため、N. Machiavelli(a cura di Gian Mario Anselmi), *Le grandi opera politiche I-II Principe Dell'arte della Guerra*, Torino, 1992 を利用した。

² 筆者の手元にある神田信夫・柴田三千雄編『『世界史 B』世界の歴史』山川出版社、2000年、151頁には「フィレンツェの大富豪で市政に君臨したメディチ家は、「学芸の保護者」として多くの学者や芸術家を養成した。ポッティチェリもロレンツォ・デ・メディチの周囲に集まった人文主義者の影響を受けて、「愛」をテーマにこの作品を描いた」という記述がある。

³ 例えば西川吉光『ヨーロッパ国際関係史』学文社 2007年、26-27頁。M.M.Bullard, "Il Magnifico between Myth and History", in M.M. Bullard, *Lorenzo il Magnifico-Image and Anxiety, Politics and Finance*, Florence,1994, p. 9. E. W. Nelson, *Origin of Modern Balance of Power Diplomacy, in Medievalia and Humanistica*, 1, 1943, pp.124-142. R. Palmarocchi, *La politica italiana di Lorenzo de' Medici*, Firenze 1933, pp. 229-246.

⁴ 根占献一『ロレンツォ・デ・メディチ—ルネサンス期フィレンツェにおける個人の形成』南窓社、1997年、22-25頁、87-88頁、279-283頁。

⁵ 万能の天才である以上に普通人としてのレオナルドを描き切った名文として、下村寅太郎『精神史の中の芸術家』筑摩書房、1981年、6-34頁(「私のレオナルド」)を挙げておきたい。また普通人としての政治支配者の肖像としては同じく下村寅太郎『ルネサンスの人間像—ウルビーノの宮廷をめぐる』岩波新書、1975年、48-76頁を参照。

する、別の二人の人物がいるように見え、両立することがほとんど出来ない性格が渾然一体となつてい
ると思われた」(傍点引用者) 6。私人ロレンツォのこの多面的性格がそのまま、その公人としての多面
的活動へと投影されることを通じ、「ロレンツォ豪華公の神話」が立ち上がる。その点でマキアヴェッ
リは今日我々が抱くロレンツォ像の形成に、大きく寄与している。

だが豪華公の「神話」と称されるように、こうした常套句化した肖像が歴史における彼の真実を伝
えるものかは、疑問の余地が多分にある。史料の精査に基づく政治史と文化史の両面にわたる実証的ロ
レンツォ研究の進展は、その脱神話化を第一の課題としたと言っても過言ではない⁷。ルネサンス芸術の
推進者という側面に関して言えば近年、祖父コジモの場合と比し彼が発注した芸術作品の寡少さや、そ
の政治上の意図に基づく作家の海外流出による芸術創造の中核としてのフィレンツェの衰退が強調され
ている⁸。また彼の美的趣味が宝飾品や古銭・骨董の賞翫といった、周辺性格のものに過ぎなかったとの
見解もある⁹。他方卓越した外交家というイメージに関しても外交書簡の分析から、その対外政策が短視
眼的な機会主義の類に過ぎないことが解明されつつある。優れた銀行経営者或いは共和国の指導的市民
としてのロレンツォ像に対しても、前者については彼の下でのメディチ銀行の経営破綻を、また後者に
ついては当時の他市民による、「専制君主」ロレンツォに対する厳しい批判を指摘できよう¹⁰。詩人ロ
レンツォの真価についても、流行のペトラルカ風定型に堕した旦那芸に過ぎないとの批評もある¹¹。

これら彼をめぐる史実と神話の断層に取り組むことが、近年のロレンツォ研究の一潮流となっている。
これに真正面から取り組んだのがルービンシュタインの論文「ロレンツォ・デ・メディチとその没後イ
メージの形成」である。この論文で彼はベルナルド・ルチェッライ、ニコロ・ヴァローリ、グイッ
ャルディーニそしてマキアヴェッリの著述を素材に、ロレンツォ神話の形成がイタリア戦争勃発後のフ
ィレンツェ知識人の政治認識、ひいては歴史認識の深化の契機となった過程を解明した。「ロレンツォ神
話」の形成に関し同様の観点を踏まえ、特にベルナルド・ルチェッライと彼が主宰した「オリチェッ
ラーリの園」が占めた決定的役割に焦点を当てた、ギルバートの「ベルナルド・ルチェッライとオリチェ
ッラーリの園—近代政治思想の起源についての研究」も示唆に富む¹²。他方、かかる神話を構成する上

⁶ 「たとえ彼が性的放縱に度をを超えて耽溺していたとしても、たいこ持ちや毒舌家と慣れ親しんでいたとしても、そしてまたその子女とともに由なし事に戯れるその姿がしばしば見られる通り、彼のような立場の人物には相応しくない程に子供っぽい遊戯に目がなかったとしても、彼についてはその大いなる人徳を汚すような、そのような悪習を指摘できるものではない。彼の内に官能的な生活と厳肅な生活が共存することを考えれば、ほとんど信じがたいばかりの結合を以て結びつけられた二人の人物が、彼一人の内に見出される程であった」(Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol. VIII-36)

⁷ ロレンツォに関する実証研究進展の画期となったのが、ルービンシュタインの監修になるロレンツォ書簡集の刊行であった(Lorenzo de' Medici (a cura di N. Rubinstein), *Lettere* 16 vol., Firenze 1977-2011)。これは画期的事業であるが、管見の限り未だ1490年までの書簡に止まっており、ロレンツォが僧主としてフィレンツェ有力市民と激しい摩擦を経験した、その生涯の再末期(1490-1492)の書簡については未だ刊行がなされていない。事業の完成が待たれる。

⁸ 高階秀爾『フィレンツェ』中公新書、1966年、39-43頁、167-170頁。高階秀爾『ルネサンスの光と闇—芸術と精神風土』中公文庫、1987年、93-98頁。根占前掲書243-244頁。

⁹ 森田義之『メディチ家』講談社現代新書、1999年、195-198頁。

¹⁰ N. Rubinstein, "The Formation of the Posthumous Image of Lorenzo de' Medici", in E. Chaney and N. Ritchie ed., *Oxford China and Italy. Florence*, 1984, pp.95-96. 森田前掲書160-165頁。根占前掲書174-178頁。I. クルーラス『ロレンツォ豪華王—ルネサンスのフィレンツェ』河出書房新社、1989年、133-135頁、266-274頁。

¹¹ 詩人ロレンツォの諸作品についてはクルーラス前掲書、157-177頁、304-343頁及び根占前掲書107-121頁、183-186頁、284-295頁を見よ。ロレンツォの詩歌の批判的批評についてはA. Rochon, *La jeunesse de Laurent de Médicis (1449-1478)*, Paris 1963, pp.148-159; F. De Sanctis, *Storia della letteratura italiana*, Milano 1956, pp.506-507.

¹² F. Gilbert, "Bernardo Rucellai and the Orti Oricellari—A Study on the Origin of Modern Political Thought", in *Jouranal*

記の如き諸要素が、特定の時期の特定の課題に即応し形成されたことに同意しつつも、これら要素が実践的意味を有した時期を超え、後世を呪縛し続けた魅力の源泉を探るという視点を打ち出したのが、ブ

レードの「神話と歴史の中のロレンツォ〈豪華〉公」である。彼女の論文は「ロレンツォ豪華公の神話」の単なる解体ではなく、現代に至るまでかかる神話が全体として孕む意味を、総合的に把握することを主眼としたものと言えよう¹³。着目すべきはこうした神話の起源が、単にロレンツォ薨去後のフィレンツェの社会情勢以上に、その在世時の彼自身による自己演出に求められるという彼女の指摘である。彼女によればロレンツォはかかる自己演出を通じ、当時のフィレンツェ人のひいてはイタリア全体の世論の、理想の政治指導者めぐる集合無意識を刺激し操作することを介し、自身の政治的資源の欠乏を補強したのだという¹⁴。

世論の無意識を操作する政治宣伝という視角からロレンツォの自己演出としての神話の出現を考える場合、理想的政治指導者が当時如何なる存在と了解されたか把握する必要がある。この点で参照すべきがヴァゾーリの論考「人文主義者と君主についての考察—（最善の支配者）についてのプラトン主義的範型」であった。そこでヴァゾーリは当時の社会通念において、新プラトン主義的哲人王理念を媒介に共和国の指導者と君主国の指導者が、その指導力の強度の違いにおいて判別されるに過ぎない互換的存在だったこと考察している¹⁵。ギルバートの「人文主義的君主観とマキアヴェッリの『君主論』」もまた、同様の立場に立つものと言える。特にこの論文では14世紀末から16世紀へと展開するイタリア政治社会の変動を背景に、支配者の政治指導の強化が理想的にも現実的にも要請されたことが、共和国から君主国への政体移行をイタリア各地に招来したことが強調される¹⁶。彼はマキアヴェッリの『君主論』を、かかる移行過程の極限に出現した著作と性格づけている¹⁷。

このように一方でマキアヴェッリの政治思考の背景に、14世紀末から16世初に及ぶイタリア人文主義における政治指導者観の展開を置き、他方にこの同じ政治指導者観の展開をロレンツォ神話形成の基底にある文脈とおいた場合、マキアヴェッリの政治思想とロレンツォ神話とはどんな関係に立つだろうか。先述のようにその『フィレンツェ史』に提示されたロレンツォ像が、ルネサンスの象徴としての普遍人ロレンツォというイメージ形成に決定的役割を果たしたとすれば、この問いはより切実なものとなる。だが確認しておかなければならないことは、にもかかわらずマキアヴェッリの著作全体を見渡した場合、ロレンツォに対する言及が極めて限られているという事実である。確かにその『フィレンツェ史』第8巻は、挙げてロレンツォの活動の描写に宛てられた巻である。またコジモからピエロそしてロレンツォへの権力の委譲を主題とするその第7巻にも、ロレンツォがしばしば登場する。だが彼の主著とも言える『君主論』、『ディスコルスイ』を検討するに、ロレンツォに対する言及がほとんどないことに気づかされる。『君主論』においては一度も言及が無く、『ディスコルスイ』においても同じく「パツィ陰謀事件」を取り上げるⅢ-6に集中的にとりあげられるものの、その他の箇所では僅かに予言・予兆を論じるⅠ-56と、「領土の行うところ、大衆もまたこれに従う」という彼の言葉を紹介するⅢ-29に軽く触れられるに過ぎない¹⁸。

この傾向につきネジェミイはその論考「マキアヴェッリとメディチ家—フィレンツェ史の教訓」にお

of Warburg and Courtauld Institution, XII, 1949, pp.119-124.

¹³ Bullard, op.cit., pp.3-7, p.41.

¹⁴ Ibid., pp.23-29.

¹⁵ C. Vasoli, "Riflessioni sugli umanisti e il principe: Il modello platonico dell' «ottimo governante»", in C. Vasoli, *La cultura delle corti*, Bologna, 1980, pp.151-156, pp.161-163. D. Canfora, *Prima di Machiavelli- Politica e cultura in età umanistica*, Roma-Bari, 2005, pp.28-33.

¹⁶ F.Gilbert, "The Humanist Concept of the Prince and the Prince of Machiavelli", *The Journal of Modern History*, VI, 1939, pp.453-455.

¹⁷ Ibid., pp.477-483.

¹⁸ マキアヴェッリ著作におけるメディチ家への言及の変遷については、J. M. Najemy, "Machiavelli and the Medici: The lessons of Florence History", *Renaissance Quarterly*, 4, 1982, pp. 155-159 を参照。

いて、次のような見解を示す。即ちこれら二つの著作でロレンツォはマキアヴェッリにより、私的徒党による共和政体の単なる破壊者として積極的評価の対象とはならなかった¹⁹。だが彼が晩年、次第に腐敗へと向かう過程としてフィレンツェ史の展望を獲得するに及び、ロレンツォの政治活動はこうした史的過程の因果の鎖の一つに組み込まれ、「専制か混沌か」という当時フィレンツェが直面した二者択一の一端として理論的位置づけを与えられた²⁰。そしてこうした理論的位置づけの確立こそが、マキアヴェッリに『フィレンツェ史』で確信をもってロレンツォを語ることを可能とさせたのだと彼は言う²¹。そこには神話的英雄としての君主の力量から不可避的な歴史過程の力学への、マキアヴェッリの関心の移行があるとネジェミイは指摘する²²。だが『フィレンツェ史』において描き出されたロレンツォは本当に、『君主論』や『ディスコルス』に考察の焦点となった支配者の姿と異なるものなのだろうか。以下において筆者は、後者において追求されたマキアヴェッリの君主観と前者において描かれたロレンツォ像を比較考察しつつ、ロレンツォ像がマキアヴェッリ政治思想に占める意義の確定を試みたい。

II-1 6世紀初頭におけるロレンツォ神話の形成

マキアヴェッリにおけるロレンツォ像の考察に先立ちここでは、16世紀初頭におけるロレンツォ神話の形成経緯を概観しよう。かかる神話の端緒が、フィレンツェの有力市民ベルナルド・ルチェッライと彼の主宰する「オリチェッラーリの園」の文人集団に求められることを明らかにしたのが、上述のギルバートの論文である。そこで彼は神話の起源が、ロレンツォ死去の直後に生じたフランス軍のイタリア侵入と、それに伴う母市とイタリア全体の政治社会の構造変化を如何に得心するかという、当時のフィレンツェ有識者に突きつけられた精神的課題への回答の努力にあったことを主張する。

かかる努力の好例こそベルナルドが残した『イタリア戦争史』に他ならない。この戦争を時代の転換点と指摘することにより彼は、時代と社会が人間の行動により変化することを明晰に自覚した。そしてかかる変化の意識がグイッチャルディーニやマキアヴェッリに続く世代の文人に継承され、本格的歴史叙述が西欧史上初めてフィレンツェの地に誕生する。注目すべきはベルナルドが「ロレンツォ・デ・メディチの死と共にイタリアの平和は終わりを迎えた」と状況を評価し、「シャルル8世のイタリア入寇とロレンツォが生前整えた外交路線の弛緩との間の連関」を読み取った点に他ならない²³。彼によればロレンツォこそがフランス軍侵入以前のイタリア、なにかんづくフィレンツェの政治-経済-文化にわたる繁栄を、その卓越した能力により一身に支えていたのである。換言すれば彼の死がその存在を要とするこの繁栄を崩壊させたと、ベルナルドは歴史の転変の究極要因をロレンツォ一人へと帰するのである。

だがベルナルドによるロレンツォの神話化の背景には、有力市民政治家としての彼の党派的利益が存在した。元来ロレンツォの義弟としてその右腕と目されたベルナルドは、メディチ家への過度の権力集中に対する反感から、晩年の前者と深刻な対立に陥っていた²⁴。彼のみならず他の多くの有力市民が晩年のロレンツォにつき、僭主以外の何物でもないとの激しい非難を残している²⁵。ロレンツォの死後専制を強化するその子ピエロ2世と彼らは更に対立した。同じくロレンツォ-ビエロ親子を僭主と糾弾するサヴォナローラに、彼らが一時とは言え政治的に合意し得たのもその故に他ならない²⁶。だが両者の

¹⁹ Ibid., pp.555-559, p.565.

²⁰ Ibid., pp.565-567, p.574.

²¹ Ibid., pp.552-555.

²² Ibid., pp.574-575.

²³ Bullard, op.cit., pp.14-15.

²⁴ Gilbert, "Bernardo Rucellai", pp.106-107.

²⁵ 市民アラマンノ・リヌッチーニやジョバンニ・カンビの「僭主」ロレンツォ批判については、Rubinstein, op.cit., p.95.

²⁶ 共和主義市民のロレンツォ批判と共鳴する、サヴォナローラの「僭主」ロレンツォ批判については、Ibid., p.95-96. Bullard, op.cit., pp.12-13. Gilbert, op.cit., p.122.

合意によるメディチ失墜後のフィレンツェの政治情勢は、彼らの期待を大きく裏切った。サヴォナローラの指導のもと中産階級を軸に大評議会体制が確立し、ベルナルドら有力市民層の政治的発言権は従来に比し大幅に制限されるようになってしまったのである²⁷。市内における階級間の対立は激化し、これを見てとった従属都市は相次いで反旗を翻す。こうした政治的混乱と国勢の衰弱を眼前に、大評議会体制に嫌悪感を強める有力市民層は、かつて口を極めて罵ったロレンツォ時代に激しい郷愁を抱懐し始める²⁸。

「無秩序は…ロレンツォ・デ・メディチの治世を礼讃せしめ、多くの人々に当時と同じ状態に再帰したいとの思いを抱かせた」とのバレンティの発言が、この間の事情を物語っている²⁹。だがここでルチエイライやバレンティが語るロレンツォは、当然ながらかつて彼らが憎悪した〈僭主〉ロレンツォではない。彼らはロレンツォ治下のフィレンツェが享受した平和と安定、彼が学芸に対し示した特別な好意に加え、ロレンツォが彼らの如き有力市民たちを率いて達成した榮譽を強調したのである³⁰。ブラード

の言を借りればこうした「批評は^{イン・マエストラ}豪華公を共和主義的衣装で覆い、彼が都市の市民生活(vita civile)を如何に尊重したか、そしてまた彼が重要案件につき指導的市民に、どれほど開けっぴろげに常に諮問を行ったか」に焦点をあてている³¹。かかる神話の創出の背景に我々は、「オリチェッラーリの園」に参加した市民フランチェスコ・ダ・ディアチェットの「最も価値ある市民—なかならず貴族が嫉妬のため迫害され、攻撃と傷害にさらされている」という記述に証言されるが如き、当時の中産階級主体の大評議会(Consiglio Maggiore)主体の開放政体(governo largo)に対する彼らの反感を読み取ることが出来よう³²。他方自身の政治的影響力回復のため彼らが依拠したのが、寡頭政治の有効性の実例として範疇化された、共和政ローマ=ヴェネツィア共和国の貴族政治である。フィレンツェにおいてかかる貴族政治=制限政体(governo stretto)が実現した時代こそ、理想的な指導市民に率いられフィレンツェに平和と政治—経済—文化の全てにわたる繁栄が実現した、ロレンツォ^{イン・マエストラ}豪華公の大御代に他ならなかった³³。

有力市民層の不満は 1512 年のメディチ家復権後も継続する。彼らは中産階級による「開放政体」の脅威に代わり今度は、ロレンツォ 2 世の登場以降次第に強化されるメディチ家の専制支配に対抗し、自身の階級的特権を擁護しなければならなかった。不肖の末裔たる当時のメディチ一門を彼らは、理想の市民的指導者ロレンツォ治下のフィレンツェの繁栄の礼讃を通じ、抑制しようとした。1512 年以後のこうした動きを代表する人物がグイッチャルディーニだと言えよう³⁴。若書きの著『フィレンツェ史』において彼は、「ロレンツォの治世において都市は全く自由ではなかった」とその専制を厳しく批判した。他方その彼も晩年の『イタリア史』では、「彼の生活は市民的なものであり、公人と言うより私人に相応しいものであった」が「彼の鷹揚さや栄光や卓越への渴望は、まさに君主に匹敵するものであった」(傍点引用者)と、彼における市民性と君主性を均衡させることにより、その辛口の批評を緩和せざるを得なくなっている³⁵。とは言えベルナルドらより厳格な歴史家として、ロレンツォの専制の看過に困難を覚えるグイッチャルディーニは、ロレンツォに「偉大な栄光を彼にもたらした」「文学やその他の優れた才能や技芸に対する彼の多大な愛と崇拜」や、「イタリアの天秤の針」(bilancia d'Italia)としての「平和が維持されるように、またある権力者が他の者の自由に余りに危険な存在とならないよう対処するよう

²⁷ ベルナルド等寡頭市民層の大評議会体制への反抗については、Gilbert, op.cit., pp.107-109.

²⁸ Rubinstein, op.cit., p.96. Bullard, op.cit., pp.13-14. Gilbert, op.cit., pp.122-123.

²⁹ J. Schnitzer, *Quellen und Forschungen zur Geschichte Savonarolas*, IV, Leipzig, 1940. Rubinstein, op.cit., p.96.

³⁰ Bullard, op.cit., pp.13-14.

³¹ Ibid., p.13.

³² Gilbert., op.cit., p.120.

³³ Gilbert, op.cit., p.108, pp.122-123.

³⁴ Bullard, op.cit., pp.15-16.

³⁵ Rubinstein, op.cit., pp.98-99.

に、絶えず気を配っていた」その外交の才へと、自身の叙述の力点を内政から巧妙にずらしている³⁶。

しかし『イタリア史』が描き出すロレンツォ像にそれと並んで顕著なのは、「全ての価値ある物事につき彼は、普遍的才華の持ち主であった」という言に窺われる、その超人化であった。メディチ家の権力強化を追認する立場において、ロレンツォ像のこうした超人化を促進したのが、ニコロ・ヴァローリの『ロレンツォ伝』に他ならない。ロレンツォ伝の濫觴としてこの著は、グイッチャルディーニの『イタリア史』やマキアヴェッリの『フィレンツェ史』の執筆にあたり最大の典拠となったが、そこにおいてロレンツォは単なる「普遍的才華の持ち主」たることを超越し、「自然の稀なる奇跡の内に算せられる人物」と評せられている³⁷。彼はプラトンの教説の幽玄なる教義に分け入った人物であり、その「特異な賢慮と廉直」により全ての人士を超越し、「あらゆる個人的情熱を後回しにして、公共善のみを心にかけて」³⁸。フィレンツェは「単にその領域を拡大したことによってのみならず、ロレンツォの叡智の…名声によって他の都市に負けず劣らず、礼讃によって」繁栄したのだ³⁹。ヴァローリにとり「市民にとっても君主にとっても同様に該当するプラトンの発言」（傍点引用者）に従い統治を行うロレンツォは、「市民と言うよりむしろ王者の魂をもつ」哲人王的指導者に他ならなかった⁴⁰。

ベルナルド・ルチェッライーフランチェスコ・グイッチャルディーニーニコロ・ヴァローリと展開する神話の深化の中でロレンツォは、卓越した才華を有する市民から超絶した叡智の体現者たる哲人王へと変貌して行く。こうした変貌を支える論理の嚆矢は既に、15世紀後半の人文主義者達の君主観の成熟に求められるが⁴¹、むしろここで着目しなければならないのは、その『フィレンツェ政体論』において達着した、グイッチャルディーニの立場である。彼はこの著において、中産階級＝大評議会を基盤とする1494年以降の政治体制に対するロレンツォ治下のメディチ体制の優越を詳細に分析した。かかる観点においてグイッチャルディーニの立場は、ルチェッライの立場と大きく重なる。にもかかわらず前者は本書でその本領とも言える歴史の変遷の感覚を踏まえ、メディチ独裁を都市の歴史学上の不可避の帰結として受容することを余儀なくされている⁴²。こうした歴史学上の文脈を踏まえたメディチ権力到来の必然性の認識において彼の立場は、ネジェミにより考察された、マキアヴェッリによるロレンツォの歴史の意味の了解の論理と極めて接近したものとなる。かくして我々の関心は遂にルチェッライ、グイッチャルディーニ、ヴァローリと並ぶ16世紀初頭フィレンツェにおけるロレンツォ神話形成の担い手たる、マキアヴェッリのロレンツォ像の析出と解釈という課題へと到達した。

III 『フィレンツェ史』第7巻～第8巻におけるロレンツォ・デ・メディチ

さてここまでの議論を踏まえ、本章において我々はマキアヴェッリの著作におけるロレンツォ像の析出に取り組もう。まず確認しておかねばならないのは、既述のようにマキアヴェッリがロレンツォに言及する個所が、事実上『フィレンツェ史』の最後の二巻（第7巻～第8巻）に限定されるという事実である。そこでまず、『フィレンツェ史』第7巻～第8巻における彼への言及個所を、何度も触れたロレンツォ神話の構成要素を念頭に取捨選択した上で、『フィレンツェ史』に描き出されるロレンツォ像の一応の総括を行いたい。そこから得られるロレンツォ像が『君主論』、『ディスコルスイ』等に詳論されるマキアヴェッリの政治思想に如何なる関係に立つかの解釈は、次章の課題となる。マキアヴェッリのロ

³⁶ Rubinstein, op.cit., p.99. F. Guicciardini(a cura di V. de Capraisi), *Opere* (La letteratura italiana- storia e testi Volume 30), Milano-Napoli, 1953, p.374. 以後のグイッチャルディーニの著作については主に本書を参照した。

³⁷ Bullard, op.cit., pp.17-18. Rubinstein, op.cit., pp.99-100. Niccolò Valori, *Vita di Lorenzo de' Medici*, Vicenza, 1991, p.94.

³⁸ Rubinstein, op.cit., p.100. Valori, op.cit., p.137.

³⁹ Valori, op.cit., p.129.

⁴⁰ Rubinstein, op.cit., p.100. Valori, op.cit., p.96, p.140.

⁴¹ Gilbert, "The Humanist Concept", pp.464-470. Vasoli, op.cit., pp. 151-159.

⁴² Rubinstein, op.cit., p.101.

レンツォ像の白眉は、『フィレンツェ史』の結語の役割をも果たすその第8巻36章であるが、総花的印象を否めない第8巻36章の叙述に比し、個別事件における彼の言動の論評としてそれに先立つ第7巻、第8巻の諸章にも目を向ける必要がある。第7巻から第8巻へと時の経過に即して叙述が進行しているので、その過程において生じる諸事件との絡み合いの中で、その間にマキアヴェッリの描くレンツォがどのように変貌し、第8巻36章の肖像へと到達したかを考察することとしたい。

『フィレンツェ史』においてレンツォが初めて登場するのは、祖父コジモの没後父ピエロが息子の妻として、ローマ貴族オルシーニ家の息女クラリーチェを配したことを伝える、第7巻11章の記述においてである。同胞大市民の娘を娶るというフィレンツェ大市民層の慣習を破るこの行動は、従来から、同家がコジモ時代の「同等者中の第一人者」たる限界を超越しようと企て始めたことの徴候と目されてきた⁴³。マキアヴェッリ自身もこの出来事につき、「彼〔ピエロ〕は、もはやフィレンツェに市民としておさまる気がなく、君主になる準備をしている」という評価を、メディチ権力の一方的強化に反発する、メディチ派内部の造反有力市民層の見解を介して下している⁴⁴。山岳党の乱(1466)に帰結するこの反発を、メディチ派内部の分裂としてこれと類似の構造を持つパッツィ陰謀事件(1478)と比較する上で鍵となるのが、「市民の大部分が、謀反人が自分たちの行為を正当化する旗印として取り上げた自由の美名に騙されて、彼らに追従した」と彼が述べている点であるが⁴⁵、この点については後に再考したい。レンツォの存在が次に大きく取り上げられるのは、1469年父ピエロが死去し、メディチ派有力市民層の推戴により彼が権力を継承する場面である。

この場面でマキアヴェッリはレンツォは「若いにもかかわらず重々しく謙虚に話したので、彼が後にそうなったような偉大な人物の片鱗をうかがわせ」たという⁴⁶。これに対し市民達は「この二人の若者〔レンツォと弟ジュリアーノ〕を自分たちの息子と見なし、また自分たちをその父親と見なす」ことにより彼らを後見し、「この若者達を尊重して、メディチ家の名声を維持する」ことを誓った⁴⁷。レンツォの結婚と彼の権力継承という二つの出来事の記述を通じて我々は、レンツォのフィレンツェ史における位相がその出発点から既に、ルチェッライらが希望した如き同朋市民を尊重し彼等から推戴される理想的指導市民像と、ヴァーローリや晩年のグィッチャルディーニが受け入れた「より良い僭主」像という、二つの方向性の葛藤の内にあつたことを読み取ることが出来るよう。

だが次にその言動に脚光があてられる第7巻30章においてレンツォは、後者の方向性へと一歩を踏み出しているかに見える。従属都市ヴォルテラの反乱への対処につきトマソ・ソズデーニら後見有力市民等はレンツォに、「太った〔不確実な〕勝利よりも瘦せた〔確実な〕合意の方が望ましい」と勧告した⁴⁸。だが事件を「自分の助言と分別が如何に有益であるか示す良い機会」と見てとったレンツォは、彼等の勧告を無視し対ヴォルテラ戦争を強行する⁴⁹。戦争は勝利に終わり「勝利はすべてレンツォの手柄であつたので、彼の名声は大きくなった」⁵⁰。だがその一方で本章最後に配されたトマソ・

⁴³ レンツォの結婚については根占前掲書、121-123頁および森田義之『メディチ家』講談社現代新書、1999年、152-153頁。

⁴⁴ 「更に次のことが付け加えられる。即ちピエロはその長男レンツォの嫁に、クラリーチェ・オルシーニを与えることを企てた。このことは各人に彼のことを誹謗する、一層の材料を提供することとなった。こうした人々は、彼がその存念を明らかにしたと言ひ募つたものである。なぜなら、この男は自分の息子にフィレンツェ人との縁戚関係を拒絶しようとしたのであるから、都市は彼を最早その一市民に押し留めて置くことはできないからである。つまりピエロは君主政を確立する準備に着手したというのだ。その同朋市民を親戚にもちたいと願わぬ者は、彼らを自身の奴隷にしたいと願っているのだと言う訳だ。当然ながらこうした人物は、同朋市民たちを自分との友として持とうなどとはしないものだ」(Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol. VII-11)。

⁴⁵ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, VII-11.

⁴⁶ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, VII-24.

⁴⁷ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, VII-24.

⁴⁸ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, VII-30.

⁴⁹ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, VII-30.

⁵⁰ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, VII-30.

ソデリーニの言辞に窺える如く、独裁色を強めるロレンツォに対するメディチ派大市民の不満もまた増幅しはじめた⁵¹。

その僭主化をめぐるロレンツォと有力市民層の「メディチ派内部の分裂」の頂点を記す出来事こそ、1478年のパッツィ陰謀事件に他ならない。こうした分裂の孕む力学とメディチ権力の変質の不可避性をマキアヴェッリは、第8巻第1章に見事に解き明かしている。事件前夜メディチ家の政治的地位は彼によれば次のようなものであった。「メディチ家が公然と(apertamente)市内で自分に刃向かった全ての敵のうち勝った後の、この家の権力について述べよう。当家は市内で唯一の権威をもつが、市民生活を続けながら他家から抜きん出ることを望んだので、自分たちに対して密かに(occultamente)策謀をめぐらす家々を乗り越えることも必要となった」⁵²。この文言にはまさにこの都市の権力闘争の焦点が、メディチ派/反メディチ派間の抗争からメディチ派内部のそれに移行したことについての、マキアヴェッリの明瞭な認識を示している。ギベリン/ゲルフィ党争、黒派/白派党争から山岳党の乱、パッツィ陰謀事件に至るフィレンツェの政治抗争は悉く、主流派と反主流派の公然たる抗争、主流派による反主流派の粉碎、主流派内部の隠微な分裂、かかる分裂の公然化という過程を反復してきた。こうした反復をもたらす党派政治の力学に依存する限り、メディチ権力が不断の動揺を被り続けざるを得ないことは明瞭である。こうした不安定性を脱却しより永続する権力を確立するためには、都市国家の制度の枠を超え派閥抗争の一方の主役たることを脱却した、絶対的地位に到達することが必要となる⁵³。かかる専制化は、同朋市民層と同家の摩擦をいっそう激化させる危機を惹起するに違いない。そして「[反専制の]陰謀は、その実例によって支配者に恐れを抱かせてしまい、恐れは、我が身の安全を図らせることにより、そのために他人を害する」ことになる。その結果としてメディチ家のような立場に達した人物は、「ミラノ公のように殺害されなければ、以前より大きな権力を手に入れてしまい、多くの場合、善人であった者が悪人に」転じざるを余儀なくされることになる⁵⁴。

にもかかわらず「若さと力に満ち溢れたロレンツォは、全てのことについて判断を下そうとし、全ては彼の意向に沿うものと皆が思うことを望んだ」(第8巻3章)⁵⁵。そして同輩の介入を抑圧し、全てを独占しようとするロレンツォのこの言動こそが、フィレンツェ第二の権門パッツィ家の反発を招く事態を招いた。だが「民衆」「自由」という言葉に依るパッツィ家の反発は、「一つ[民衆]は、メディチ家の富と[それから]の施しのせいで聞く耳を持たなくなっていたし、もう一つ[自由]は、フィレンツェでは知られていなかったので」、惨めな失敗に終わったとマキアヴェッリは言う⁵⁶。この発言は、「市民の大部分が…自由の美名に騙されて、彼らに追随した」という、先に言及した山岳党の乱の際の叙述と比較しても、フィレンツェ市民のメディチ専制受容の深刻化を示唆するものと言えよう。こうした大衆のメディチ専制の受容は、陰謀後のその演説における「この都市に思っても見なかった(

⁵¹ 「私にはその都市[ヴォルテッラ]はもはや失われてしまったかのように観じられる。なぜならもし諸兄がこの都市を合意の上で獲得したのであれば、諸兄等はそこから有用性と安全性を引き出すことに成功しただろう。だがこの都市を力ずくで手に入れてしまったため、困難な時勢に際会した時この都市は諸兄等に、脆弱性と煩わしさをもたらすことに、平時時には損害と支出を招き寄せることになってしまおう」(Machiavelli, *Istorie fiorentine*, VII-30.-) というトマソ・ソデリーニの言に、貴族たちのロレンツォの独断専行に対する反感が滲み出ている。

⁵² Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol.VIII-1.

⁵³ かかるこの時期に先立つフィレンツェ政治史の力学に関するマキアヴェッリの自覚は、その論考『フィレンツェ政体改革論』における、「しかしながらコジモが欲することと雖も、多数の者による審議を経なければならなかったということが、メディチ家の政権に多大な弱点をもたらしました。この政権が存続した間しばしば市民総会が開催され、しばしば多数の追放者が生じたものような事情によります。あげくの果てにシヤルル8世のイタリア侵攻という突発事によって、この政権は失われてしまいました」という行文に如実に示されている(Machiavelli, *Discursus florentinarum rerum post mortem iunioris Laurenti Medices*).

⁵⁴ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol.VIII-1.

⁵⁵ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol.VIII-3.

⁵⁶ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol.VIII-8.

non pensava)多くの敵がいたことを知りましたが、また思っても見なかった(Io non credeva)多くの熱意ある友がいることも知りました」という言にも如実に窺える⁵⁷。そこに語られる「思っても見なかった」敵とは、メディチ家派に属しつつ反旗を翻したパッツィ家を初めとする有力市民たちであり、他方「思っても見なかった」友とは「民衆」「自由」の呼び声にもかかわらず、メディチ擁護に駆けつけた大衆達に他ならない。「ロレンツォの思慮深さと気前の良さのお蔭で、彼の家が手にしていた幸運と人々の好意は大きなもの」だったからである⁵⁸。この記述は同朋市民の掣肘を脱却せんとするロレンツォの政治基盤が、こうした不特定多数の群衆からなる世論の支持に存したことを示唆している。

指導的市民と僭主の狭間に立つロレンツォの姿を浮かび上がらせるのが、『フィレンツェ史』第8巻第10章において彼が行う長大な演説である。そこで彼はまず「我らに非常な敵意を示した連中でも、我らは、彼らを私的に痛めつけたことはありません」と強調する⁵⁹。だがこうした強調こそが逆に、(公共善) (bene comune)の覆いの下に、専らメディチ派の私的な利益が追求されていた、当時のフィレンツェ政治の党派性を露呈させるものではないだろうか。そして「我らの家があなた方から一致して称賛されてきた理由は、ほかでもなく、慈悲、気前の良さ、恩恵によって、他の人を凌がずにはいられなかったから」という彼の発言にも、メディチ党がとりもなおさず私人により、私的利益の追求のため結集された集団であることが明らかに示されている⁶⁰。実を言えば「慈悲深い行動の影には、しばしば専制君主を生むきっかけが隠されている」と題される『ディスコルスイ』III-28に詳論される如く、マキアヴェッリの政治理論によれば、公共的回路を介して獲得されるのではない市民の美德や名声こそ、公的システムを私的党派が乗っ取る前兆なのである⁶¹。そして「父の死後、まだ若年の私は、あなた方の助言と好意がなかったら、私の家の地位を維持できなかった」というロレンツォの告白こそ、メディチ権力の党派性の紛う方無き開示と言えよう⁶²。それはパッツィ陰謀事件という党派の危機に際し、専制の度を強め批判の対象となっていたロレンツォが、自身の政治基盤を再強化すべく同朋有力市民に供した譲歩の証でもある。このような譲歩の文脈を踏まえ再度脚光をあてられるのが、理想的指導市民としてのロレンツォ像であろう。「わたしは、あなた方の危険[を取り去ること]よりも、私の安全を優先するような、そのような卑劣な市民ではありません。それどころか、あなた方についた火を、私の死によって、喜んで消し止めるつもりです」と語るロレンツォの姿には、フィレンツェ市民的人文主義の体現との趣すら漂わせるものがある⁶³。ロレンツォのこの発言に対してなされる、「われらは…喜んで彼方の名声と地位を保護するつもりでいます。自分たちが祖国を失わない限り、彼方がその地位を失うことはないでしょう」というメディチ派市民団の返答は、かかる譲歩を代償に彼に付与された、フィレンツェ有力市民層の彼に対する支持の再確認を示すものだ⁶⁴。

だがこのような譲歩は決して永続するものではなかった。超人的な「その視野の広さ、才能の鋭さ、判断の沈着さ」によりナポリ王フェランテの賛嘆を勝ち得たロレンツォは王との和平を達成し、パッツ

⁵⁷ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol.VIII-10.

⁵⁸ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol.VIII-9.

⁵⁹ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol.VIII-10.

⁶⁰ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol.VIII-10.

⁶¹ 「このような名声がかかる公的手段により獲得される場合には、それは廉直簡潔なもので、社会に対しけて危険をもたらすようなものではない。だがかかる名声が、上に示したような私的手段によって獲得される場合、それは極めて危険でありまた看過の余地無く有害である。この私的手段とは即ち、あれこれの自分以外の個人に金銭を貸与したり、彼等と縁戚関係を結んだり、裁判官に対して彼を擁護してやったり、その他同様の個人的好意を示すことで恩恵を施すことに他ならない。このような手段を介して彼等は恩恵の施し手の朋党となる。そしてこのような手段を通じて恩恵を施された者は、公共の福利を損ない法を破るよう囁きされるようになるのである」(Machiavelli, *Discorsi*, III-28)。

⁶² Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol.VIII-10.

⁶³ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol.VIII-10.

⁶⁴ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol.VIII-10.

イ陰謀事件以来の一連の危機を見事乗り切る⁶⁵。「祖国に平和をもたらすために自分の命を危険にさらした…彼の偉大な資質とこの最新の功績」の故にロレンツォは、「[ナポリ王との交渉のため] フィレンツェを発つ時に偉大な人物であったとしたら、戻ってきた時にはこの上もなく偉大な人物になっていた」（傍点引用者）⁶⁶。換言すれば「同等者中の第一人者」たる彼に同朋有力市民が授けた信任を背景に交渉を行った彼は、この成功により「同等者中の第一人者」たる地位を超越するカリスマ性を、大衆から認められることとなる。「喜びを以てこの都市から迎えられる」彼は「天まで祭り上げられ」、「彼の助言や判断は、敵の武器や兵力よりも大きな事を成し遂げた」と喧伝された⁶⁷。

マキアヴェッリによるロレンツォの肖像画とも目される、『フィレンツェ史』第8巻36章は正しく、このような半生の政治的努力により到達した彼の帝王的地位と符合するものである。本章は「フィレンツェ人は、サルザーナの戦争が終わってから、ロレンツォ・デ・メディチが没する1492年まで、とても幸福に暮らしていた。というも、ロレンツォは、イタリアの戦火がおさまり、彼の分別と権力によってその状態が確立した後は、自分と自分の都市を偉大なものにすることに意を用いたからであった」という行文からはじまるが、そこに窺えるのは他でもなく、その叡智によりイタリアの平和とフィレンツェの繁栄を招来した、半神ロレンツォの姿である⁶⁸。本章にはもはやこれまでの叙述の主題であった、指導的市民ロレンツォを取り巻くフィレンツェ政界の暗闘の欠片すらも存在しない。そこに描き出されるのは、まさに後世「ロレンツォ神話」と称されるものそれ自体に他ならない。

国制において超越的地位を占めたロレンツォにとり相応しいのは、もはや権力闘争ではない。「ロレンツォは、運命の女神と神に愛されたので、彼の企ては全て幸福な結果となり、彼の敵の企ては全てが不幸な結果となった」のである⁶⁹。彼に相応しい政治とは寧ろ獲得された権力を駆使しての、国家における福利の実現である。本書における政治家ロレンツォの伝記的記述の到達点である第8巻36章が、「[ロレンツォは] 芸術に優れた者は誰であれ、非常に愛した。文人を好んだが、それについては、アンジェロ・ダ・モンテプルチアーノ（通称ボリツィアーノ）殿、クリストフォロ・ランディーノ殿、ギリシア人デメトリオス殿が、確かな証言となる。だから、ほとんど神のようなジョバンニ・[ピッコ・] デッラ・ミランドラ伯は、自分が詳しく調べ上げたヨーロッパの他の土地には行かずに、ロレンツォの気前の良さに心を動かされて、フィレンツェに居を構えた（1484年）…ロレンツォは、建築、音楽、詩を心より楽しんだ。彼が作った詩だけでなく、評論した多くの詩も世に出た。フィレンツェ人の若者が人文学を学べるように、ピサ市内に大学を設置したが、そこには当時最も優れた人々が招聘された」と、彼の芸術庇護活動を特筆大書するのも、本章のそのようなロレンツォ評価に基づいている⁷⁰。

グイッチャルディーニと異なりマキアヴェッリはロレンツォの肖像を描き出すこの個所で、その外交手腕の詳細を具体的に触れることを省略している。それどころか「このような彼の生活様式、こうした思慮深さや幸運は、イタリアの支配者のみならず、そこから遠く離れた地域の支配者からも、称賛の念を以て認識された」という言辞のように、あたかもその卓越した存在そのものが、「イタリアの平和」の担保と目されたかのようですらある⁷¹。そして「フィレンツェのみならず、イタリアでも、その思慮深さに対するこれほどの名声を手に入れて没した者はおらず、その死が祖国をこれほど悲しませた者もいなかった。彼の死によって巨大な破滅がもたらされると言うことを、天は多くの明らかな予兆で示した」という記述から推察される如く⁷²、他でもなくその存在の喪失そのものが「イタリアの平和」崩壊の原

⁶⁵ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol. VIII-19.

⁶⁶ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol. VIII-19.

⁶⁷ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol. VIII-22.

⁶⁸ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol. VIII-36.

⁶⁹ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol. VIII-36.

⁷⁰ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol. VIII-36.

⁷¹ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol. VIII-36.

⁷² Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol. VIII-36. ロレンツォ薨去時人々が見た数々の予兆については、Bullard, op.cit., pp.38-39. このような数々の証言の存在は、ロレンツォ神話が第一義的には知識人たちの利害や主張に

因そのものと解釈された。「イタリアの平和」という一つの時代そのものと同一視される存在としての、

『フィレンツェ史』第 8 卷 36 章のロレンツォ^{イン・マフィア}豪華公—我々はかくしてそこに、「ロレンツォの神話」の完成を見てとることができるのである。

IV—マキアヴェッリ政治思想におけるロレンツォ・デ・メディチ評価

さて『フィレンツェ史』第 7～8 巻において描き出されるロレンツォ像に関するここまでの考察を総括すれば次の如くなる。即ち当初第 7 巻前半において描かれたロレンツォ像は主に、メディチ派指導者として同朋に諮問し同朋と都市を共治する第一市民としてのそれであった。他方山岳党の乱からパッツィ陰謀事件へと展開する政治的危機を克服し、大衆間にカリスマ性を獲得することを通じ第 8 巻巻末に浮かび上がるのが、神の恩寵を授けられ、万人に勝る超越的叡智を踏まえ独裁する哲人王ロレンツォの姿であった⁷³。注目すべきは、このアリストテレスの第一市民ロレンツォとプラトンの哲人王ロレンツォという彼の二つの極相が、「山岳党の乱からパッツィ陰謀事件へ」という政治力学の歴史的転変を介して、有機的發展として統合されている点である。それはフィレンツェ史において政治権力が、一群の有力者達から唯一の絶対者へと次第に集中されていく過程と換言しても良い。

かかるロレンツォ像をマキアヴェッリの政治思想の文脈において解釈しようとするにあたり、考察の糸口となるのが、「市民的君主政について」と表題される『君主論』第 9 章に他ならない。その論旨を簡単にまとめておこう。マキアヴェッリよればあらゆる都市(città)には貴族(grandi) 平民(popolo) が存在する。両派は前者が「支配し抑圧する」ことを望み、後者が「支配されず抑圧されない」ことを望むため、都市の支配権をめぐる不絶に闘争を繰り広げる⁷⁴。そしてこの闘争において一方が他方に対抗できなくなるに及び、劣勢に立った側が優勢に立った側に対抗すべく、「彼らの一人に名声を集め、この人物を君主に推戴する」。これにより市民的(civile)な君主政が出現することになる⁷⁵。だが貴族を基盤とする市民的君主政と平民を基盤とする二つの市民的君主政の間には優劣がある。なぜなら前者の場合君主は、彼と同輩だと信じる多数の同朋市民に支持されているため、思うが儘に統治を行えない。他方後者の場合、服従心の無い者は皆無か少数に止まるから、思うが儘の統治を行うことが可能である⁷⁶。それ故マキアヴェッリに従えば、平民の支持により君主の座に上ったものはもちろん、貴族の支持によりそうなったものであっても、「何にも増して民心をつかむようにしなければならない」⁷⁷。貴族が少数であるのに対して平民は多数であり、貴族を創出することは容易であるのに対し、君主は常に同一の平民の大群を統治しなければならないからである。そして平民の要求は「命令されず抑圧されない」ものに過ぎないから、彼ら支持を調達することは極めて容易である。

このような市民的君主のあり方が、メディチ家出身の指導的市民的姿に酷似していることは言うまでもない。では彼らは貴族型の市民的君主と平民型の貴族的君主のどちらに属するのであるうか。メディチ派と称される有力市民の団の同意のもとに支配を行った点において彼らは貴族型の市民的君主と言

基づくものであったとはいえ、その起源が彼らが大衆と共有した衝撃の感覚にあったことを示唆している。そしてまた彼らが作り出したかかる神話が、現実政治の有効性をもちえたのもまた、大衆がロレンツォという象徴を通じて無意識に了解していた世相認識と共振し得るものだったからである。

⁷³ Vasoli, op.cit., pp.158-161. Canfora, op.cit., pp. 25-28. Gilbert, pp.464-470.

⁷⁴ Machiavelli, *Il Principe*, Cap.9. 『君主論』第 9 章がマキアヴェッリ思想全体に有する決定的位相については、石黒盛久『マキアヴェッリとルネサンス国家—言説・祝祭・権力』風行社、2009 年、第 1 章「市民的君主政」から「自分で支配すること」へに詳論した。

⁷⁵ Machiavelli, *Il Principe*, Cap.9.

⁷⁶ Machiavelli, *Il Principe*, Cap.9.

⁷⁷ Machiavelli, *Il Principe*, Cap.9. また同じ『君主論』第 1 9 章にも、「統治の行き届いた国家や賢明な君主は貴族を絶望させず、民衆を満足させその心をつかむことに全力を尽くしたのである」とある(Machiavelli, *Il Principe*, Cap.19).

える。だが一方でロレンツォの行動に窺える如く、自身の政治的指導性の確立にあたり彼らは、その政治宣伝を通じて不特定多数の平民による世論の支持に依存した。このことはパッツィ陰謀事件において首謀者ヤコボ・パッツィが「[メディチに対し] 平民を蜂起させるため、「自由！」と叫びながら街中を駆け回った」にもかかわらず、メディチ家に加勢するため平民たちにより挙げられた「メディチ！メディチ！」(pallei, pallei)という叫び声に圧倒されてしまったという、グिटツァルディーニの証言からも明らかだ⁷⁹。晩年のロレンツォがこうした大衆操作に留意していたことは、「[ロレンツォは] この平和な時代に、彼の祖国で常に祭典を催した。そこではしばしば、馬上槍試合、古い時代の事件を題材にした演劇、古い時代の凱旋行列を模倣したのが見られた。彼の目的は、都市の豊かさ、人々の団結、名誉ある高貴さを維持することである」という『フィレンツェ史』の記述からも推察し得る⁷⁹。だがこうした平民型君主政への到達は、君主の政治指導力の上昇の過程の未だ頂点ではない。

『君主論』第9章の議論はその後半に至り、更に次の如き一文を導き出す。「このような君主は市民的体制から絶対的体制へと上昇するにあたり、危機に陥るのが常である」。彼は「公吏(magistrati)によって支配する」か「彼ら自身(loro medesimi)によって支配する」が、前者は他者に依存しているため、いざとなればこの公吏の思うが儘にされてしまう。一方後者の場合君主は自立しているため、危機に及んでも危険に陥ることは無い⁸⁰。他方「彼等自身で支配すること」とは、第9章につき精緻な考察を展開したカドーニの議論によれば、臣僚(servi)に補佐されつつ政策決定権を自身の手集中する政治体制である。マキアヴェッリは具体例を『君主論』第4章に、トルコの政治体制として示しているとカドーニは言う⁸¹。

しかし平民の積極的な支持のもと、安定した政治基盤を確立している平民型市民的君主政を解体してまで、こうした君主が更なる絶対権力を握ろうと欲するのは何を意図してのことだろうか。同じく大衆に支持により政権を握った、一種の市民的君主たるサヴォナローラを範例にマキアヴェッリは、「説得されたままの状態に民衆をいつまでも引き留めておくことは難しい」その故に、「言葉を聞かなくなったら、力を持って信じさせるような対策を講じなければならない」と、武力とそれを組織する自分の力量に依拠する権力の掌握を推奨する⁸²。これこそ「彼ら自身で支配する」ことの究極の本質に他ならない。こうした権力は何のために必要なのか。第二のモーゼを自負したサヴォナローラがそうであったように、歴史の過程の最終段階において腐敗した社会を再定礎する神話的立法行為を、半神として再演せんがために他ならない⁸³。この意図において第9章はよく論じられるが如く、「腐敗した国家に存在する自由な政体をどうしたら維持していけるか、また自由な政体がない場合どうしたらそれをつくることができるか」と詞書される『ディスコルスィ』I-18の議論と直結する⁸⁴。I-18では先行するI-16、17を承け、その腐敗が極限に達した社会の根底的再生のため、絶対的権力を握る立法者が不可欠であること

⁷⁹ Guiccardini, *Storie fiorentine*, IV.

⁸⁰ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol. VIII-36.

⁸¹ 『君主論』第9章最終部分の解釈については、石黒前掲書28頁以下及び77頁以下。

⁸² トルコ評価を媒介とした『君主論』第4章と第9章の連関については、石黒前掲書29頁。拙著でのこの連関をめぐる議論は、G.Cadoni, "Intorno a due capitoli del *Principe*", *La cultura*, IV, 1971 に基づいている。

⁸³ Machiavelli, *Il Principe*, Cap. 6. マキアヴェッリによる終身大統領ソドリーニ統治下における臣民徴兵軍創設計画の核心も、このような支配者による政治権力の全面的掌握の実現にあった(石黒前掲書69-72頁及び石黒盛久編著『戦略論体系⑬マキアヴェッリ』芙蓉書房、2011年、322-326頁)。

⁸⁴ 「幸運にはではなく自身の力量に依拠して君位に登ったこれらの人物について語るにあたり私は、それらの人物の中でもモーゼやキュロス、ロムルスやデセウスといった人々をその中でも最も卓越した人々として挙げたい」という、『君主論』第6章の行文が立法者の任務の神話性をよく示している(Machiavelli, *Il Principe*, Cap.6)。

⁸⁵ 『ディスコルスィ』I-16-18の議論の展開については庵子生浩輝『征服と自由—マキアヴェッリの政治思想とルネサンス・フィレンツェ』風行社、2013年、350-357頁。ただ同書を一読すれば直ちに理解されるように、その最終的結論において同書のマキアヴェッリ解釈は筆者とは全く異なっている。同書への批評は本論の内容とも密接にかかわるが、改めて別の形で行うこととしたい。

が強調される⁸⁵。元来どの国家もその始原に、独自の統治様式(l'ordine di governo o vero dello stato)を据えた神話的立法者が存在している⁸⁶。このような統治様式がその基盤に存する限り、時の変化の中で法を改変したり「腐り切っている頭の部分を切り捨てる」ことにより、国家は改革者のもと「さしたる苦勞もなしに、自由と秩序を復活する」事が出来る⁸⁷。「現行の統治制度に影響を与えること」を除き、最大限の権力を付与される古代ローマの独裁官こそ、かかる改革者の好例であろう⁸⁸。改革派こうした人物の指導のもと、国家を統治洋式に則した「本来の姿に戻らせ」(riritarla spesso al suo principio)れば足りる⁸⁹。だが「病膏骨に入る」という言葉の如く人心の腐敗が極度に達した場合、こうした統治様式そのものの再生が求められる。こうした革新を遂行するためには、「こうした尋常一様の(ordinario)手段が不適切なものであるからには、暴力(violenza)や武力(armi)といった非常の手段(straordinario)に頼らなければならない。そしてそのためには就中万事に先んじてその都市の君主となり、それを思うがままに(a suo modo)処理(disporre)できるようにしておくなければならない」のである⁹⁰。

それではマキアヴェッリは、自身の生きた時代のフィレンツェをこのような観点から、どのような時代と判断していたのであろうか。当時のフィレンツェの世相に対する彼の憤懣は『フィレンツェ史』の随所に垣間見られる。加えて『戦争の技法』第1巻における登場人物コジモ・ルチェッライの、「時代の度を超えた腐敗と墮落の中に生を受けた以上…このような時代の潮流に反抗し常識的慣習から脱却しようとした者は、悪評の的となるか万人の軽侮の対象となってしまいます…昨今の生き方のこの墮落した状況に仰天しベルナルドは古人そのままの模倣を断念し」という発言は、当代フィレンツェの世相人心に対するマキアヴェッリの最上級の否認を示している⁹¹。そもそも『ディスコルスィ』I-33でのコジモの台頭とカエサルの台頭の類比は、メディチ権力の出現を共和国フィレンツェにおける極度の腐敗の徴候とするマキアヴェッリの評価以外の何であろうか⁹²。

⁸⁵ 『ディスコルスィ』I-9は「ある共和国を再形成したり、或いは旧制度を全く外れて改革しようとする時、その担い手は単独で事を遂行しなければならない」と表題されている(Machiavelli, *Discorsi*, I-9)。

⁸⁶ Machiavelli, *Discorsi*, I-18.

⁸⁷ 「事を良く理解してもらうため次のように論じよう。ローマにはまず何よりも先に統治のないは国家の様式というものが存在し、それに沿って公吏たちが法に基づき市民を支配していた。この国家の様式とは即ち、民会や元老院、護民官や執政官の権限、公職の請求や選任の手法、法制定の手続きといった統治の機構のことである」(Machiavelli, *Discorsi*, I-18)。そして武力や暴力に基づく独裁権力を行使してかかる国家の統治様式自体を創出することこそが、【注81】に言及されたモーセ、キュロス、ロムルス、テセウス等による、国家創見の神話的行為に他ならない。

⁸⁸ 「彼の権限は…誰に諮問することなく万事を決定し、告発を行うことなくあらゆる人物をも処罰する事にまで及んでいた。だがしかし独裁官は元老院や民会の権限を剥奪したり、都市の旧来の制度機構を廃止し新しいそれを創出することのような、国家の根本を作りかえる行為を行うことは許されてはいなかった」

(Machiavelli, *Discorsi*, I-34)。

⁸⁹ Machiavelli, *Discorsi*, I-17.

⁹⁰ Machiavelli, *Discorsi*, I-18。メディチ政権の非常性については Nejamy, op.cit., P.560 を参照。

⁹¹ Machiavelli, *Dell'arte della Guerra*, Vol. I. 『フィレンツェ史』の次の個所にも注目せよ。「そこから平和な時にしばしば生じる事が常であるような弊弊が、この都市に生じてきた。並外れて放縱となった若者たちは金銭を、装束や宴会その他の由無し事に途方もない濫費を行った。また暇を持ち余した彼等は、遊びと女に時間と資産を蕩尽した。彼等の関心はただただ華やかに着飾ることと小賢しげに狡猾にものを語ることだけに向けられていた。そして他人を誹謗中傷することは、何にも増して賢明なことと、多くの人に考えられていた」(Machiavelli, *Istorie fiorentine*, Vol. II-28)。これらの行文は「かくして良きものから悪しきへの下降が、悪しきものから良きものへの上昇が生じる。というのも力量から静穩が、静穩から怠惰が、怠惰から無秩序が、無秩序から世の荒廢が生じるからである。同様に荒廢から秩序が、秩序から力量が、力量からは栄光と良き幸運が生じてくる」(Machiavelli, *Istorie fiorentine*, V-1)という行文と照らし合わせるなら、マキアヴェッリにとり当時のフィレンツェが、モーセやロムルスに匹敵する指導者による再定礎の行為により (Machiavelli, *II Principe*, Cap. 6)、世相人情の長年の下降から上昇へと転じる、転換期にあると認識されていたことを示している。

⁹² 「コジモ・デ・メディチは…自身の賢明さと他の市民たちの無知が彼に授けた世間の好意によって多大な名声を獲得し、国家の脅威となった…これと同様の事態がローマにおいても、カエサルと共に生じたのであ

以上の如きマキアヴェッリの政治思想における君主の機能を踏まえた上で、議論の焦点をロレンツォ・デ・メディチに戻したい。『フィレンツェ史』に描かれたロレンツォ・デ・メディチは、メディチ党という有力市民の党派の頭首としてその助言を承けつつも、パッツィ陰謀事件という危機を奇貨とし己がカリスマ性を高め、平民にその支持基盤を移しつつ有力市民の掣肘から脱却しようとした点において、『君主論』第9章における平民型市民的君主の典型とも言えよう。だがマキアヴェッリが彼に理論的に要請した課題そこに留まらない。父の集権化方針を継承したその子ピエロはイタリア戦争の激動の中、貴族に反旗を翻されたのみか平民からすら見捨てられてしまう。確かに権力にとり、貴族の助言も平民の支持も二次的には必要な条件であろう。だがマキアヴェッリの観点からすれば、運命を自身の力量で克服するためには、自身の武力(*armi proprie*)を持つことが不可欠である。むしろ君主の主体性の担保としての武力があり、かつそれを適切に使用しさえすれば、貴族の助言も平民の支持も自然に獲得できるのだ⁹³。それこそが「どのような時勢になろうとも、市民に対して自分の政権がどうしても必要であると感じとらせる」唯一の方策に他ならない。

もちろん庸劣な君主がそのような試みに足を踏み入れ、単に私利私欲を満たすためにこのような絶対的体制を打ち立てようとするれば、私欲と公益の相反により「必然的に絶えず剣を手から離せなくなる」結果、「生きる限り苦しみにさいなまれ、死後は死後で、消し去ることの出来ぬ悪評をあびることとなる」⁹⁴。他方、本来君主たるに相応しい卓越した力量を持つ英傑であろうとも、健全な共和国にあって時節を弁えず、マンリウス・カピトリヌスの如く野心の赴くままに行動すれば、共和国本来の統治様式に回帰しようとする市民の良識により断罪を蒙り悲惨な末路を辿ることとなろう⁹⁵。マキアヴェッリの判断によれば、このように比類を絶した力量を有し、腐敗の極に達した共和国において、「国家を崩壊させるためではなく(*non per guastarla*)…再建するために(*per riordinarla*)」、「私利私欲のためでなく公共善のため、世襲のためでなく祖国のため統治する」英傑にのみ、絶対権力を握ることが求められる⁹⁶。そのような統治は「彼に安定した生涯を約束し、その死後も輝かしい名声を与える」ものであり、「神といえども、本当のところ人間に対して、これ以上の素晴らしい荣誉をもたらすチャンスを与えてくれる」ものではないのだ⁹⁷。

『フィレンツェ史』に描かれたロレンツォ像を検討すれば、彼がかかる神から与えられたチャンスに恵まれた人物であったことがわかる。彼は腐敗の極に達したフィレンツェ共和国のいう時節に際会し、

った」(Machiavelli, *Discorsi*, I-33)。

⁹³ 「このような差異は残虐さが上手に使われたか、下手に使われたからよって生じている。残虐さがよく使われるということとは、もし残虐さについて良いという言葉を使うことが適切であるとした上でのことではあるが、こうした残虐さが自身の安泰の確保の必要のため一挙に行使され、その後はそれに固執せず、可能な限り臣民の福利に転じることにより可能となる」(Machiavelli, *Il Principe*, Cap.8)。

⁹⁴ Machiavelli, *Discorsi*, I-10.

⁹⁵ もしマンリウスがマリウスやスラが活動した腐敗した時代に生を享けていたなら、彼の野心の実現に成功したかも知れない。そしてマリウスやスラ或いは彼ら以後に登場した僭主政を渴望するその他の者たちと同様の成果を収めたに違いない。また同様に、マリウスやスラがマンリウスの時代に生まれていたら、彼等の活動の初期の段階で、すぐさま抑圧されてしまったことだろう」(Machiavelli, *Discorsi*, III-8)。

⁹⁶ Machiavelli, *Discorsi*, I-9, I-10.

⁹⁷ Machiavelli, I-10. この個所の文言と名高い『君主論』終章第26章の文言(なぜならこれらの英雄たちは古今稀な驚嘆すべき人々ではあったものの、それでもやはり普通の人間であり、彼らのうちの一人として目下の如き多大な好機を有した者はいなかった)のである。なぜなら彼等の事業は目下のそれほど正当なものでも、容易なものでもなかったからである...何物と雖も新興の支配者にとり、彼自身の手で新しい法と新しい制度を打ち立てることに等しい荣誉をもたらすものではないのである)或いは『フィレンツェ政体改革論』の文言(これに加えて、法と制度を以て共和国や王国を改革した者程、その言行において礼讃されたものはありません。こうした人々は半神的英雄たちと並んで礼讃すべき第一の人々です。なぜならかかる改革をなす機会に恵まれた者は少数であり、かかる改革をなす術を心得ている者は更に少数であり、かかる改革を現実にし遂げる者は極めて少数だからです...天は一人の人間に対して、このこと以上に多大な贈り物を与えることも、これ以上に偉大な道筋を指し示すこともありません)との間には極めて興味深い類似があり、マキアヴェッリ政治思想全体の目的を考える上で極めて重要な素材である。

ほとんど超人の域に達するほどの力量^{フイェルト}に恵まれ、加えて「彼の企ては全てが幸福な結果となり、彼の的の企ては全てが不幸な結果となる」ほど運命^{フオルトナ}の女神に愛されることにより、世上に偉大な人物と認識されていた⁹⁸。そして具体的には貴族型市民的君主からパツィ陰謀事件を契機に、平民型市民的君主へと変貌し、ついにその晩年には国家改革のための絶対的権力の掌握という、政治的上昇の最後の、だが場合によれば死をもたらしかねない切所にまで到達していたのである。換言すれば自分の武力(arme proprie)を編成することにより政治的に自立し、モーゼ、ロムルス、テセウスら古の建国者と並ぶ栄光を獲得し得るか否かの瀬戸際立っていた。

確かにその早すぎる死は、この〈死の跳躍〉(salto mortale)に己を賭ける「危機に見舞われる」(periclitare)ことを彼に回避させた。そして恐らくこのことこそが、彼が享受した最大の幸運^{フオルトナ}だったのかも知れない。ともあれマキアヴェッリはその『フィレンツェ史』におけるロレンツォ像において、第7巻にベルナルド・ルチェッライが描き出したような理想的第一市民ロレンツォを、第8巻にニコロ・ヴァローリが創出した如き哲人王的絶対支配者ロレンツォを配すると共に、この両者をグイッチャルディーニと通底し合うような歴史過程を介した社会体制の変動の理念により統合している⁹⁹。このことにより彼は、自身が『君主論』第9章に原理論として提示した、市民的君主制(principato civile)から絶対的政治(governo assoluto)への上昇(salire)を、祖国フィレンツェにおける範例として示したのである。その意味でロレンツォはかのチェーザレ・ボルジア以上に、マキアヴェッリの歴史的政論を具現化した象徴に他ならなかつた。だがチェーザレがそうであったように、ロレンツォもまたその不可避の道程を終点まで辿り着くに先立ち、天の配剤によりこの世から取り去られてしまった。フィレンツェの文人官僚マキアヴェッリの生涯の課題とは正に、ロレンツォに代わりフィレンツェの歴史を一古のキュロスやモーゼの如く一再起動させるに足る力量^{フイェルト}と幸運^{フオルトナ}、そして意志を有する立法者的君主を彼自身の手で養成することだったのである。

(金沢大学)

⁹⁸ Machiavelli, *Istorie fiorentine*, VIII-36.この箇所をはじめ『フィレンツェ史』第8巻36章に描かれたロレンツォの叙述は、実はヴァローリの『ロレンツォ伝』そのままの引き写しである。ヴァローリの『ロレンツォ伝』はマキアヴェッリの『フィレンツェ史』に先立ち、後者と同じ教皇レオ10世に献呈されている。Bullard, op.cit., p.19.

⁹⁹ 但し後者においては歴史展開の不可知の中に、ロレンツォ像は開放され一回的な個性を獲得しているのに対し、前者においては歴史がポリビオスの循環性へと回収されることにより、それはかかる循環の規則性の中で人間が歴史に関与するための、一つの範型ないしは指標と化してしまっている。こうした点においてマキアヴェッリにとりロレンツォ像は、その思想表現の上で極めて高い象徴性を有していると言える。

World History Research

The Journal of World History Research

No. 4 October 2014

Contents

Articles

Machiavelli e l'invenzione della figura di Lorenzo il Magnifico—Alcuni considerazioni sul libro ottavo di *Istorie fiorentine*—

Morihisa ISHIGURO

The Origins of the Native People in America: The Seventeenth-Century Concept

The Controversy between Hugo Grotius and Johannes de Laet over the Origins of the inhabitants of the New World

Taihei YAMAMOTO

Pflicht, Gleichheit, Sicherheit: Diskurs der allgemeinen Wehrpflicht in dem Reichstag nach Deutsch-Französischem Krieg

Hiroki NAKAJIMA

Kaisergeburtstagsfeiern und nationale Integration

Jun OBARA

Research Notes

Novelist Nichiren-Characteristics of Writings(Nichiren Ibun)-especially Shōsoku

Tsunayoshi OZAKI

Meaning of the name "Tribune" in the history of European and American newspapers

Masahide ISHIZUKA

Review Article

The Widening and Deepening of the Historical Studies of Japanese-German Relations in the Infancy

Tomonori OI

Translation

»... die letzten Schlacken marxistischer Verhetzung zu lösen« -

Der Ruhrkampf und die Rote Ruhrarmee in der nationalsozialistischen Erinnerungskultur

Joana SEIFFERT, Takeo SUZUKI

Essay

Tsunayoshi OZAKI

Review Essay

Yuichi KAWASHIMA

Miscellanea

World History Research
Saitama, Japan